

# 社会（開発）活動と宗教の役割り・参与について

荇 蕉 寂 泉

（佛教社会事業研究所助手）

はじめに

昨年夏、東京で二三回国際社会福祉会議が開催され、盛況の中に終わったことは記憶に新しいところである。

筆者もこの会議に参加する機会を与えられ大いに刺激を受けたわけですが、今回この会議で議論された報告の中から、特に宗教と社会福祉についての発表をとりあげ紹介したいと思います。

この国際会議は、第二三回国際社会福祉会議、並びに第二三回国際社会事業教育会議、及び第九回国際ソーシャルワーカー・シンポジウムの三つを含んでいるのでありますが、実際にはこの国際会議に先立って今一つ第四回国際ソー

シャル・デベロップメント・シンポジウムが開かれていたのであり、これは他の会議に比べて地味でありましたが三日間、泊り込みで行なわれた会議であり、内容もそれ故に充実したものであったと思われます。

さて、この会議の中で「開発と宗教の役割り」と題しての分科会があり、そこでカリフォルニア州立大学のイザイア・リー博士が発表された「社会開発における教会の役割りと参与の再考」と題する研究発表について紹介したいと思います。

この研究発表はキリスト教（プロテスタント）教会の社会（開発）活動への参与について論じたものであり、それ故に本誌の意図する仏教福祉とは直接つながるものではあ

りませんが、その活動の理論や実践については十分に今後の参考になるものと考えとりあげたわけであります。

紙数の関係もあり、その内容を検討することにまでは及びませんが、何かの参考になればと思っております。

さて、氏の研究発表は、(一)教会の種々な役割の紹介、(二)国際的な視野での社会経済的、或いは心理、社会、文化の面における開発と現在の教会の参与について、(三)社会開発を増進するための教会の努力及び社会変革資源としての社会事業の専門化と教会の関係、更には社会(開発)活動における教会の参与の強みと弱点について、の三点から社会(開発)活動と教会について考察されている。

ここではそれら三点について詳しく翻訳紹介することは出来ないが、我々が参考可能と思われる教会の社会(開発)活動への参与の理論的根拠やそれにもとづく実際の活動といった点に焦点を絞り乍ら、簡単に紹介してみたいと思う。

## 一 教会と社会・神学的概念

私は既に教会という言葉を用意に使用してきたのであるが、ここである教会とは言うまでもなく基督教の教会で

あって原文では Church (チャーチ) となっていることを始めに断っておかねばならない。

そこで氏の研究についてみるならば、はじめに教会の社会・神学的概念として、その教会の捉え方をあげている。

### (一) 教会の意味について

旧約聖書によれば教会とは神から真理を授かるための人々の集まりである。またヘブライ語の字義からみれば「選民の集い」或いはモーゼを通して神の真理を受けにくるユダヤの人々の集いであると訳される。

キリスト生誕後における新約聖書では「会衆」又は「キリスト信者の集い」として説かれるし、キリストの死後は世俗の世におけるキリストの身体として神学的に理解される。

更にプロテスタントの信仰によれば統一的な教会と地方の教会との二つの基礎的概念に分離され、前者はキリストの身体であり、信者の共同体であり、キリスト、彼自身がそれを創成、設立し、そこから全地方教会の信者にキリストの精神を送る場であると解されるのである。そして後者はキリスト信者が特定の地域的な広さの中で信仰を固め、

愛と平和と正義のために神の意志をもち込むことを形成する場であり、それ故に洗礼をうけ、彼ら自身イエスの教えを通して神の意志を遂行する目的のために組織されたキリスト信者の集まりであると解されている。

## (二) 教会の社会・神学的使命

一般的に言つて地方教会は教会内に精神的、会衆的指導を行う長老職とか、信者を導き説教する牧師、神の人々を監督する司教、及び慈善やコミュニティー・サービスを遂行し、自らを長老の召使いと卑下する助祭をもつのであり、また全ての教会メンバーと信者は洗礼と信仰告白を通じて認識されている。

そしてその意味で教会とはキリストの身体の一部であり、変革が全てに対して貢献することを目的とした相互に独立した共同体となるのである。それ故にキリスト者は全ての人々のために自ら発して苦悩する召使いをモデルとして生きることに召されるのである。即ち神の恩寵によりキリストの善行を示し、また神の正義を明示する新しい創造者となるのである。

## 二 教会の機能

前述の社会・神学的な目標に沿つての教会の機能について特に社会（開発）活動に焦点をあててとりあげることとする。

前述の目標に沿つての教会の機能とは

- (一) 全ての信者が一堂に会し、いのりを捧げ讃美歌を歌い、伝導者や牧師、長老による説教を聴いて、全能の神、宇宙の創造者への崇拜を成し遂げること
- (二) 聖書や教義、信仰を誓い、更に毎日の生活に信仰を實踐すること
- (三) 福音主義に携わること
- (四) 信者のコミュニティーのための世話や管理を實踐すること
- (五) コミュニティーサービスを行うこと

の五つをあげている。

ここで特に(五)のコミュニティーサービスについてその解釈をみるならば、

キリスト者は「汝の隣人を愛せよ」の言葉の通り、愛、

平和、正義の実践を命令されるのであるし、教会は世界に奉仕するために存在するのである。それ故に福音の声明は絶ざるコミュニティサービスとヒューマンケアの中に形を変えて実践されねばならないのである。

これについてみるならば教会は幾年もの間、人の倫理を教えてきたし、医療ケアを提供してきたのであり、又、貧困者には服を与え、飢えた者には食物を与え、家のないものを保護してきたのである。近代における教会のコミュニティサービスは地方教会の個別的な扶助から教会相互の扶助へと拡大し、教会の世界組織の社会・経済開発プロジェクトを通して難民達にサービスを提供している。特に二〇世紀に入ってコミュニティサービスと社会・経済開発における教会の機能は都市化と産業化の波の中で急激な社会変化に対応しながら社会福音と社会解放の神学に基づいて展開されているのである

### 三 コミュニティサービスと教義

教会が種々なる社会的活動に参加してきたことは歴史を通してみることができる。しかし、特にコミュニティサー

ビスに深く関連し、理論的・実践的に体系化されるのは今世紀の初めの頃の社会福音運動にその基盤をもとめることができる。即ち一八九六年プロテスタントで社会的関心をもつ人々がジョージアに集り、ユートピアン・ソサエティーを建設、「神の愛への尊敬」という社会福音の雑誌を発刊、また、一九一七年にはウォルター・ローシャンブッシュがエール大学で「社会福音主義の神学」について講演している。そして、市民戦争後よりヒトラーの出現まで社会福音運動はプロテスタントの社会的関心への神学的、倫理的な認識の基となった。

「キリスト信仰と社会活動」を編纂したレインホルド・ニーバーはキリスト信仰の社会真理性を奪回するために社会福音主義を従来の束縛から解放し、個人主義とその他の俗界への活動へと称揚したのである。それによって社会福音主義は社会における愛の進歩的な発展を通して神が降臨すると理解される様になった。そしてその理解のもとに社会福音主義は教会のコミュニティサービスへの態度に影響を与えることとなった。今、社会福音主義は人々の人生を社会・組織の実体の結合としてとらえるのであり、それ

によれば人間の罪は悪魔の王国の中にあつて我々を超人間的  
社会制度のもとに束縛しているのである。それは一般的  
に苦しみのくびきとして表わされるところのものである。

ここで社会福音主義は、通常「拝金主義」として言及され  
る経済的搾取を悪魔の王国における最も中心的悪魔と捉え、  
神の王国の建設のために、現代社会を改良する社会運動或  
いは遠大なる社会変革を通して悪魔の王国に挑戦するもの  
として表わされるのである。つまり、教会のコミュニティー  
サービスとは、社会活動を通して悪魔の王国を崩壊させる  
べく実践されるのであり、その様な社会活動はコミュニ  
ティーや州、国、更には世界的レベルでもって、社会・経  
済的狀態を研究することを通し、或いは社会とコミュニ  
ティーサービスの研究、評価を通じて着手すべきである  
と考えるのである。

#### 四 社会活動の実践

次に先に掲げた論理のもとに展開される教会の社会活動  
の実践について、その方法と実際活動についてみることに  
する。

##### (一) 社会活動の実践の方法

教会は近代工業社会の中に入り込んでいる様々な問題の  
存在を認めている。そして、キリストの福音はこれらの問  
題に一つの態度をもっていることも言うに及ばない。しか  
し、また、これらの問題が個々人の改善や説教によつては  
殆んど解決され得ないであろうことも認めねばならない。

そこでコミュニティーサービスや社会活動は、これら社  
会・経済的、政治・経済的問題を解決するために教会によつ  
てとられるべき必要なステップであると考ええる。

この考えのもとに前世紀の後半から今世紀の初めにか  
けて、セツルメントハウスやYMCAの組織がつくられたし、  
また、エписコパル教会やバプティスト教会の組織、また  
エписコパル教会とコングリケーション教会の共同組織、  
プリズビテリアン教会の組織というものが設立された。第  
二次世界大戦後にはそれら各々の組織から、プロテスタン  
トの指導者がジュネーブに集まり、平和と正義、及び全世  
界を通じての大きなスケールの社会・経済、政治・経済の  
変革をめざす世界組織を発足させた。更には近年は精神的  
指導者であり人間的同情の象徴である教会の牧師達は第三

世界の人々の社会・経済発展に巨視的視野で大きく関心を示してきたし、また第一世界に対しては少数者のグループに目をむけてきたのである。そして更に急激に社会・経済開発の領域に参与すべく動きつつあるのである。

## (二)CCPDについて

ここでは社会開発への教会参与の全国委員会 (Commission of the Church's Participation in Development 以下CCPDと略) について、記するのであるが、個々の具体的活動については、言及する余裕がないので、その活動理念に重点をおいて紹介することとする。

CCPDの目標とするところは貧困者が貧困や不正行為に打ち勝つための闘いに参与することであり、その活動に参与するプロテスタントの教会を援助することを目的とする。

そしてそれは、地方、国、世界のレベルにおける社会・経済開発の全てを包含するものである。

またCCPDの機能には技術的サービスのための教育や社会・経済開発のための調査研究、及び全世界を通しての社会・経済開発プロジェクトのための財政援助を含んでいる。

る。

更に、その理念についてみるならば、CCPDの神学と哲学は開発過程における人々の参加を最も重要なものと考えているのであり、特に、彼らが開発の結果を即時的に享受する人々である場合に最も力を注ぐものである。つまり、「開発における人々の参加」こそ重要であると考えるのである。

そしてその方法論としては、CCPDの活動とサービスはプロテスタントの神学とキリスト信仰にもとづく社会・経済哲学及び資源——それは我々の占有物ではないが、神の恩恵にもとづいて我々のもことになるのである——の管理によって導かれるものであると考える。

以上全てについて、キリスト教の倫理によれば、貧者は富者と同様に独立する権利があるという考えにもとづくものであるとしている。

## 五 教会の社会（開発）活動への評価と課題

最後に以上述べてきた教会の社会（開発）活動についてまとめの形でその特色と今後の課題についてみることにす

る。

社会・経済的、社会・政治的、社会・文化的な開発を推進するための教会の開発の捉え方は政府や世俗の経済学者によって使われている開発の概念よりもより広範なものである。

つまり、政府や世俗の経済学者による開発の概念はGNPにもとづく経済成長のみであり、それ故、全体社会の向上のための社会・経済的制度や社会・政治的体制の変革を考慮するものではない。これに対し、教会のそれは開発が、経済、社会、政治、文化の見地を含み、全体としての社会化の過程として捉えることを強調するのであるとしている。

またその為に社会（開発）への教会の参加は社会的問題の根本原因に立ちむかわねばならないと考えるのであり、更に深く立ち入るならば、それは他の国に依存するある国の経済的、社会的、政治的、文化的依存性とは、他を制圧するある社会階層の発想に基づくが故に、その様な社会階層への挑戦として発展すべきであるといえる。

その様な問題の捉え方は一つの新しい社会・経済的、社会・政治的な使命を創造する先駆的な思考を世に広めるこ

ととなろう。

その意味で教会は、その組織体制とCCPDのネットワーク・システムを通して、社会開発過程において効果的な社会変革機関となることをめざすのである。

更に加えて教会の社会（開発）活動への参与の特色についてのである、

教会は自発的な社会・宗教的組織として社会開発の領域において先駆的な役割りを演ずるために、また創造的、革新的な開発プロジェクトと結合するために、より自由で柔軟な立場をとれるのであり、それは、政府の開発機関や国連の社会・経済的機構や組織に比べて、運営上、管理上の手続きが素速く、しかもずっと簡単であるという特色を持ち添えている。

しかし、今後の課題として教会は社会制度の一つの統合化された一部分として、社会開発プロジェクトにかかわっているコミュニティーのメンバーや、政治的な指導者、或いは政府の役人といかなる関連と指導性をとるべきかが問われねばならないし、又、合理的で人間的方法を用いて地域的、国家的な開発を支えている政府の、或いは世俗の開

発機関との連携も確立すべきであると考えているのである。

## 六 まとめ

以上、難しい研究を非常に簡単に、しかも、部分的にしか訳していない為、意を解せないところも多々あることと思われる。

そしてそれはこの研究を行われたイザイア・リー博士にとっても実に不本意なものであろうことは想像にかたくない。

しかし、本論の意図するところは、はじめにでも述べた通り、教会の社会（開発）活動への参与について氏の研究発表を紹介することであり、それは今後の仏教社会事業研究において何がしかのヒントを与えるものであると考えたからである。

そこで最後に紹介者の私見でもって、この研究発表より、参考になるであろうと考えられるいくつかの部分を取りあげ、まとめにしたと思う。

まず、はじめにとりあげるべきは、何といってもそのスケールの大きさであり、国際的視野に立っての問題へのと

り組みである。

今や我国は世界に誇る経済大国となり、それ故に、他国における問題であっても決して無関心ではいられなくなっている。

ここにおいて仏教社会事業は一体、何をなし得るか？また何をなすべきなのか？は当然今後の課題として考慮すべき点となろう。またその意味で本誌に紹介されている東京浄土宗青年会の活動等は今後に期待されるところが大きいし、更にその活動は単に東京浄土のみではなく全国浄土から全仏教のとりくみとして発展させていく必要がある。

また、この研究発表でも触れられているところであるが「政府や世俗の経済学者による開発はGNPに基づく経済成長のみであり、……、これに対し教会のそれは開発が経済、社会、政治、文化の見地を含み、全体としての社会化の過程として捉えることを強調する」という考えは単にキリスト教のみでなく宗教的基礎に行われる活動全てに応用可能な概念とみられるし、更に政府や世俗による経済中心の援助がマルコス前大統領の私腹を肥やす結果に終わっていたという失敗をおかす危険性からは離れたところに位置



付けられるという利点を生かすことも可能となるのである。

次に考慮すべき点は、社会に於ける様々な問題の捉え方とその対応の仕方である。

つまり「教会は近代工業社会の中に入り込んでいる様々な問題の存在を認めている。……これらの問題が個々人の改造や説教によつては殆んど解決されないであろうことも認めねばならない」と研究発表の中で記している通り、近代工業社会における様々な問題を宗教的に捉え、直接的に、宗教の力でもって解決にのぞむのではなく、それらの問題をはっきりと近代工業社会の中で問題と位置付け、それらについて、社会・経済的、社会・政治的、社会・文化的といった種々の分野から分析、研究し、各々の立場から対応していくという明確な態度を示していることである。

そしてその様に理解する限り、自らの立場をも明確にする必要があるわけで、その点については、教会を社会変革機関として位置付けることにより、その様な理解と対応を可能にしているように思われる。

最後に前二者とも関連し、神学と社会の理解の問題が出てくることとなる。これは具体的な形での教義と社会活動

の関連であり、キリスト教会に於いては長い歴史の中で教義と社会活動における各々の実践体系の関係をうちたててきたのであった。即ち、現在学問的に理論付けられ、実際に使われている社会事業の技術や方法の殆んどは、キリストの教義にもとづく援助技術の体系であるし、今日のそれについては先の研究発表の紹介の通りである。

そしてその様な動きをみるならば、教会の行う社会活動の殆んど全てについて、教義に基づく必然性とそれ故の実践性が裏付けられているのである。

さて、仏教社会事業についてはどうかであろうか。

浅学の私などが、どうこういうものではないが、以上が何かの参考になれば幸いである。